

ダニエル・パリッシュ・キダーは、ブラジルの民衆文化の特殊性を矮小化することなく、精緻な観察と分析を試みるなかで、ブラジル社会に根付くカトリック文化の「異質性=否定的要素」を明らかにしようとした。キダーによれば、この「異質性」とは、カトリック教会の司祭と信徒の関係や、各種宗教行事に見られる「惡習」のことであった。こうしたキダーの視座は、本連載後半で扱うプロテスタント系の学校や教会の設立に関わる人物たちが当地を調査研究する際の与件ともなり、しばしば布教の正当化の口実としても用いされることになる。

カトリック文化に内在する異質性と信徒の「無知」

1839年、キダーはブラジル北部パラー州の州都ベレンを訪れ、毎年10月に開催される「ナザレの聖母の祭り（Festa de Nossa Senhora de Nazaré）」を見学した。この祭りはブラジル最大級の宗教行事であり、現在でもカトリック三大行事の1つに数えられている。ちなみに、その他の2つは、北東部ペルナンブーコ州ブレジヨ・ダ・マードレ・デ・デウス市で行われるキリストの受難劇「パッション・デ・クリスト（Paixão de Cristo）」とバイア州サルバドルでの、アフリカ系ブラジル宗教カンドンブレ（Candomblé）にカトリック要素が融合した「ラバージェン・ド・ボンフィン（Lavagem do Bonfim）」という祭りである。

とりわけ「ナザレの聖母の祭り」と「ラバージェン・ド・ボンフィン」は200年以上続いている、多様な人種・民族・文化の歴史が刻印されている。そのため、いずれも「混血のブラジル文化」というイデオロギーと親和的な世界観を顕著に表す祭りとして知られている。また、これらの祭りの特徴は、異人種間の差異を「混血」というレトリックによって溶解させ、国民的統合を支える表象装置として機能している点である。

なお、「ナザレの聖母の祭り」はアマゾン地域の守護聖人であるナザレの聖母を讃えるもので、市民は莊厳な行列をなして聖母像を担ぎ、ベレンの中心部を練り歩きながら一年の平和を祈願する。この祭りは宗教的意義にとどまらず、地域固有の音楽・民族舞踊・料理など伝統文化を体現する場でもある。ところがキダーは、この祭りそのものの宗教的意義については肯定的に評価しつつも、宴席における参加者の態度や素行を厳しく批判し、著書 *Sketches of Residence and Travels in Brazil* (1845) において次のように記している。

パラー州には、ノッサ・セニョーラ・ジ・ナザレ祭という著名な宗教祭がある。この祭りは移動祝祭日であり、毎年9月または10月のいずれかに開催される。（…）参加者はおおむね整った服装をしており、行列の様子も非常に秩序立っていた。聖像が教会に安置されるとノヴェナが開始され、それは八夜にわたって行われた。（…）その後、人々は思い思いに教会敷地内を歩き回り、宴会、舞踏会、そして賭博を楽しんだ。なかでも賭博は最も強い関心を集めしており、多くの者が熱中する光景を目の当たりにして、私は残念に思わざるを得なかった。（…）このような娯楽や愚行にふけりながら、それでも自らを神に仕えていると信じ込まされているという事態は、まことに嘆かわしいことである。（pp. 292, 295, 297）

ノヴェナ（九日間の祈り）が終わると、人々は宴会や舞踏会、

賭博に興じた。キダーはそうした光景を目にして「残念に思わざるを得なかった」と述べ、さらに「このような娯楽や愚行にふけりながら、それでも自らを神に仕えていると信じ込まされているという事態は、まことに嘆かわしいことである」とも記している。すなわち、彼は宗教祭の本来の意図を理解しないまま賭博に熱中する人々には道徳心が欠けていると解釈し、その様子を鋭く批判したのである。さらに彼は、宗教祭の期間中に展示されていた多数の絵画のうち、とりわけ聖母が病人を治癒する姿を描いた作品について、これを「不作法な絵」（p. 296）とまで酷評している。

こうしたキダーの批判に対して、彼の伝道活動に注目したヴァスニ・デ・アルメイダとジョゼ・ネト・ソウザ・ゴメスは、人々が宗教的意義を十分にわきまえていなかったのは、カトリック司祭たちが信徒に十分な宗教教育を施してこなかったためであり、その結果、信徒たちは「無知の状態」にとどめられていたのだと分析している。そして、この「信徒の無知」こそが、のちにプロテスタント宣教師たちが布教の現場でカトリック側の抵抗に対抗する際の決まり文句（対抗言説）の一つとして流布されていったのだと指摘している。⁽¹⁾

ブラジル的カトリック表象とその文化的特性

こうしたキダーの批判は、「信徒の無知」と相まって、ブラジルは「遅れている」という認識が、プロテスタント宣教師たちのあいだに根付いていく一因となった。しかし、こうしたブラジル人像とは逆に、宗教祭や絵画などで顕在化していた諸表象は、ブラジル固有のカトリック文化として理解すべき多層的な表象慣習の総体であった点について、キダーは十分に理解していなかったといえる。

ある意味で、キダーの調査は自らの見聞を「広げる」ことにとどまり、差異の指摘=批判へと一直線に接続する構造を内包していたため、差異の記述は必然的に「異質性」といった評価枠組へと直結してしまったのである。キダーが理解しえなかったブラジル固有のカトリック文化とは、いわゆる「クレオール主義」の文脈に属するものであり、そこでは白人・黒人・先住民といった異質な文化的価値観が混淆することで生成された新たな文化の産物であった。このような前提に照らせば、聖母表象や宗教祭における賭博にみられる「自由度の高い表象」も、厳密な支持対象をもたず、むしろ操作可能な表象として人々の間に受容されていたと考えることができる。したがって、キダーを困惑させたのは、まさにこのブラジル独自の異種混淆性にもとづく文化的生成の構造そのものであり、その実態を十分に把握できなかった点にこそ、彼の観察の限界があったといえよう。

[注]

(1) Vasni de Almeida, José Neto Sousa Gomes. “Daniel Parish Kidder: sociedade, identidade e cultura nas narrativas de um protestante viajante no século XIX.” *PLURA, Revista de Estudos de Religião*, vol. 7, no. 2 (Jul-Dec 2016), p. 108.

(2) 同上、p. 116.

(3) ここでいうクレオール主義とは、歴史学者エドワード・カマウ・ブラスウェイト（Edward Kamau Brathwaite）の定義に基づくものであり、異なる起源をもつ文化要素が混合し、その混合過程から新たな文化的生成が生み出されていく動態を重視する立場を指す。